

## 野尻抱影先生をお偲びして

小森 幸正\*

野尻抱影先生は去る 10 月 30 日 満 93 才の天寿を全うされ、かねて予約されておられたオリオン靈園に旅立たれた。ご葬儀は去る 11 月 12 日世田谷の医王寺でしめやかにそして盛大に執り行われたが、会葬者中に歴代の東京天文台長を初め多くの天文学者や天文関係の方々の姿が多数見えたこと、さすがは「星のおじさん」に応しい告別式だったと感銘している。先生はお年の割にお丈夫な方でハリー彗星をもう一度見ることをお約束していたのに、昨年 10 月 17 日ご結婚記念日という日に、奥様が老衰で亡なられ、そのショックでご自分も脳血せんで倒れられ、一時は危なかったほどだったが、暫らくしてからよくなられ、今年になってからは、ベッドに起してもらって、執筆を続けられるようになった。今年の春ごろから私の家内を診て下さっている鍼の土田先生をご紹介申し上げたところ、その先生は同じ大学出であるし若くて明るい方なので、先生に非常にお気に入られ土田先生の来診数をふやすようお待ちになっておられたことは、せめてもの先生へのご恩返しの一つになったと思っている。

先生は早稲田大学英文科を出られてすぐ山梨県の甲府中学に英語の先生になられ 5 年おられた。この間南アルプスの山々を踏破し、登山はベテランで日本山岳会にも関係をもっておられた。中学時代遠足の前にはよく草鞋の穿き方や杖の突き方の指導を受けたものだ。朝日の昇る前、山々が赤く崩れるモルゲンロートなる言葉も先生の口からよくもっていた。先生は甲府中学では、大島健校長——北大のクラーク博士の薰陶を受けられた農政学者で、後に音韻学で文学博士となられた方（動物学者大島正満博士の父）——のお気に入りで、甲府中学を辞めたいと申し出られた時、辞めるなら娘を貰えといわれて、次女の麗子さまと結婚をされたということである。

先生は英語の先生でありながら頭は角刈りで教壇以外は和服で通されたので、先生の洋服姿の写真は見当らない。先生が東京の麻布中学に転勤された翌年の大正 2 年、私は一年で英習字の手ほどきを受け以後 5 年間英語を教えて頂いた。当時の麻布中学は陸士、海兵への予備校のようにいわれ江原素六校長以下こちこちのしかも年配の先生ばかりの中にあって最も若くそしてハンサムな先生は生徒の受けもよかったです。綽名のなかったのは先生だけだった。気が向くと英語の時間を棒に振ってギリシャ神話、グリムやアンデルセンの童話など実際に面白くお話になりわれわれを夢の国へ誘って下さったものだっ

た。しかし一般によくいわれているように、星の話ばかりされたということはなかった。先生は英文学を専攻されたというものの、決してハイカラでなく、厳正な心の持主で、礼儀の正しい方だった。文字でわかるように先生独自な書風——これは隸書から出ているという清の何子貞に傾倒——を創られ、本屋泣かせの字といわれるがしかし馴れると却って下手な字より読み易い字で一生通された。私はこの字よりも先生の絵に惹かれた。私が 3 年のとき先生が受持ちとなられたこともあるてか先生とお親しくなり、度々下さったペン画入りのハガキ 5 枚は私のところへ来ている先生のお手紙とハガキ 350 通に対しひょうに少く貴重なものだし、おそらく他の方々へはお書きになっていない。先生は画家になられるつもりだったこともおっしゃっておられたし、亡くなられたみか子さんが油絵を修業中夭折されたの残念がられていた。先生は先生獨得なロマンティシズムで説かれた著作を通じて、日本の今日の天文学者やアマチュア天文家のうちに文学的な心の目を拓かれた功績は大きいが、もし先生が絵の方でご精進になられたら、あるいはご令弟の大佛次郎さんのように文化勳章を貰われていたか、人間国宝になられていたかも知れない。先生とは大正七年から私の商船学校への入学、関東大震災、そして病氣等で暫くご無沙汰申し上げたが、大正 14 年 7 月愛宕山の JOAK へ入ってから、先生と再び接する機会が急増した。先生も大正 8 年研究社へ入社され、時間的余裕もおできになったので、ラジオの趣味講演にしばしば出演願って、私が甲府放送局に転出してからも、甲府まで度々お運びいただきてご放送願ったことがあった。昭和 3 年に先生の処女作「星座巡礼」の印税が入ったので、天体望遠鏡を買ってくれとお頼みを受け、当時の日本光学の三田豊岡町の古川 久工場長にお願いして作っていただいた 10 cm 屈折式經緯台はロング・トムと命名され桜新町のお宅のお庭で長い間活躍した。この望遠鏡はカール・ツァイスのカタログを参考にして造られたこの種のものでは我が国で最初のそして最後のものかも知れない。

先生は、俳句がお上手であった。この心が文章の上につながっていたし、また仏教、美術の魅力の追求をつけられ傍ら芝居の方もなかなか通だった。岡山の石田五郎先生もその方で先生とは特別なおつき合いがあったようだ。昭和 10 年頃故山根平造さんが世話をされた青山天文同好会にもご出席を願っていたが、今その会員中で現役で富田弘一郎氏が活躍しておられる。建築装飾のモ

\* 日本アストロドーム（株）

ティーフとしてギリシャ人によって装飾化されたアカンサスを一株分けて下さって、これがコリソシャン・オーダーの柱冠のもとだと教えて下さった。ご自宅のまわりに20株ほど植えてあってこれを皆さんにあげると楽し

んでおられた。先生は早稲田大学在学中島村抱月に心酔されていたが、大正8年抱月の死後、先生はご本名正英（まさふさ）を抱月の影を抱く意で抱影とされた。私には今はもう抱く影がなくなった、平々。

## 星の文人—野尻先生追憶—

大崎正次

ご長寿のおかげで長いあいだ身近かに接し、また数多くの著書にも親しんできましたが、いま身にしみて感じることは、野尻先生はやっぱり文学の人だったなあ、ということでした。先生の文章の中に波うつものがロマンティシズムであることはたしかですが、それは先生の若き日の心をゆさぶった西洋の世紀末的、日本の耽美的な明治浪漫主義ではなかったかと思っています。それは終生変わることなく先生の血の中を流れています。あの多少甘くはありませんが、肌ざわりのよい、さわやかな文章の味わいも、星の美と神秘を語るには、まことにふさわしいものであったとしかいえません。その点では、先生のなくなられたあと、先生をこえる甘美な星の文学はもうあらわれまいと思っています。

それにしても、先生のみずみずしい感覚、それを高くもり上げた豊かな詞藻、文字通り東西古今にわたる宏大な学識、それらを常に掌中のものになしえた博覧強記、その上、耳こそ遠くなられましたが、思考明晰であられてのご長寿、そのどれをとっても先生は驚くべき超人でした。

ゆきぎりの読者には、野尻先生は天文学の啓蒙的解説者、星を語る隨筆家としかみえなかつたかもしません。しかしその解説は、時には専門家よりもたくみに説かれ、隨筆といつても、散文詩ともいべき美しい文章を書かれ、またしばしば軽妙な俳句もよまれました。先生の書かれたものにうらうちされた先生の學問芸術に対する教養の広さと深さはなみたいていのものではありません。先生は洋の東西、それも古今にわたって實に広く書物を読まれました。というより、世界の人の星の美感・星についての知識を求めるために、万巻の書を読まれたのかもしれません。先生こそは、星の美の探求のために、そ

の生涯を星に入れあげた稀有の方でした。

したがって著述にあらわれた領域の広さと息の長さも驚嘆すべきものでした。90歳をこえてなお現役の執筆者であった例を先生をおいて私は知りません。先生のご専門の英文学のことはさておき星の神話・伝説についての比較民族学的調査は、全世界に及んでいます。誰も目を向けなかった星の和名、それに伴う民間伝承の蒐集は、日本の方言学会民俗学会へ大きく貢献されました。これは先生のお仕事の中でも、長く後世に残る特筆すべき業績です。美術史の世界では、特に仏教美術の中の星辰信仰についての図像研究は、先生の独壇場でした。ただ先生の御研究は、文学の人であった先生らしく、いかめしいアカデミズムのよそおいはとられませんでした。これは終生野にあった方というだけではなく、長年おつとめになった研究社で身につけたジャーナリストとしての感覚意識が、そうさせたのかもしれません。先生の時折示された新鮮な発想と表現は、マスコミというメディアを晩年に至ってもはっきり意識しておられました。

先生は文人ではありましたが、行いました脱俗の文人ではありませんでした。隨筆家というよりは詩人であり、学者であり、年季のはいった編集人でもありました。野尻先生はまさにまれにみる独自の風格をもった〈星の文人〉であったと思います。このような先達をえた日本の星好きはまことに幸いでした。またそういう星の文人のおかげで、多方面にわたる星好きが多く生まれたかもしれません。星に生涯を捧げたかわりに、御自身でも生涯星を愛し楽しみ、その上に日本中の天文爱好者に心から慕われた先生はほんとうに幸福なお方であったと思います。

新惑星の邦名に就て

野 風 拍 影

甚だ驚異な提案ではある。しかし、これが承認して貰ふものか否かは、知らないと思ふ。

國の名が失禮ではないかと思ふ。國の名が失禮ではないかと思ふ。國の名が失禮ではないかと思ふ。

國の名が失禮ではないかと思ふ。國の名が失禮ではないかと思ふ。國の名が失禮ではないかと思ふ。